## ４　木を見て森を見ない評価

**司会（元高S ）**　現中H先生から「木を見て森を見ない」評価が多いというご指摘がありました。それはこの場にいるみなさん共通の考えだと思います。「木を見て森を見ない」評価ということについて、あるいはそうしたことに陥らない評価や授業の在り方についてどう考えるか、みなさんのご意見をうかがいたいのですがいかがでしょう。

**現高S**　私はコロナ禍の中でZoomの授業と対面の授業を経験して思うのは、生徒が授業の中で触れ合うこと、生徒同士で対話をするということをすごく楽しんでいるということです。だから「思考・判断・表現」の力を発揮するような活動を生徒がグループの中でやるのがよいのではないかと思います。人と人とが触れ合えるのは当たり前だと思っていたけれど、コロナ禍を経験してそうでもなかったということをみんな認識したと思います。ですから、子どもたちがインタラクションというか自分の気持ちを伝え合う活動を大切にしていきたい。その中で生徒が頭をしっかり使うような活動を工夫していくというのが大切なことではないかと思います。

**現高F**　私はスキャホールディングというか、足場架けを教師が工夫することが大切だと思っています。生徒が「できそうだな」と思うような仕掛けを作るということですね。ライティングをやっているので、どうしたら書けるようになるかを教えて、生徒に書く体力をつけるようにがんばっているんですが、子どもの書いたものを読むと「この子はがんばっているな」というのがわかるんです。だから生徒ががんばっているのを見つけてあげるのが教師の仕事ではないかと思います。やる気を出せるような、書いてみたいなと思えるような足場架けをして、生徒がアウトプットをしてそのことで自信をつけさせていくということの繰り返しではないかと思っています。

**大学K**　現高F先生の話を聞いていると、先生の学校は頼もしいな、ぶれてないなと感じます。何を教えるかということがはっきりしているからだと思いますね。

**現高F**　いや、そんなことはないですよ。ただやることは各自に任されていて、私の場合はいつも試行錯誤なんですが、私学なので指導要領に縛られていないというのがありがたいと思っています。公立の学校は大変だと思います。今のような評価をしていると、子どもたちのモチベーションが下がっていくのではないかと危惧しています。

**大学K**　私が気になるのは、みなさん評価に興味がありすぎるということなんです。現高F先生の学校でよいと思うのは評価が先に来ていないということ

です。どういう子どもを育てるか、どういう力をつけるか、そのためにどういう活動をさせるかというのがまずあって、評価はそれについてくるものだと考えています。それが自然な考え方だと思います。今は、どういう力をつけるか、どういう活動をさせるかがあいまいなまま評価規準だけが先に決まっている。文科省が先に評価規準を出しているので現場が混乱するのではないかと思います。順序が違うと認識すべきではないでしょうか。

**現高S**　現高F先生のところは、個々の先生に授業をゆだねているのがよいのではないかと思います。今の学校は教師がみんなで同じことをしようとしているのがまずいのではないでしょうか。子どもにこれを伝えたいという思いが先生にあれば、個性的な授業をしてよいと思うのですが、学校現場では、みんなが一斉に同じことをやらなければならないと考えています。それはよくないのではないでしょうか。先生の個性が発揮できないことが教員のなり手が少ないことの一因かもしれません。教員はみんなそれぞれでよいと思います。

**現高F**　「知識・技能」は今まで通りテストで評価すればよいと思うんですが、「思判表」とか「主体的に学習に取り組む態度」は評価する教員の主観なんですね。優しい教師もいれば厳しい教師もいるので、教師によって評価が違ってくると思う。だからそこは疑ってみる必要があると思います。本当は生徒ががんばっているのに、教師がそれを見取れないということもあると思う。主観的な評価はこわいと思います。テストは客観的なデータとして使えますが、主観的な評価を持ち込むといたずらに子どもを不安な気持ちにさせるのではないかと思うんですがどうでしょ う。

**大学K**　まったく同感です。

**司会（元高S ）**　かなり時間もたちましたので、本日の話し合いのまとめにかかりたいと思います。これまでの話し合いで、私たち小委員会としての共通の考えがはっきりしてきたのではないかと思いますが、ではこれからどうしたらよいかということについて話し合うことを今後の課題としていきたいと思います。いかがでしょう。

**元大K**　今回の話し合いで大変重要な問題が提起されたなという印象です。私は学習指導要領の作成に携わった経験がありますが、ここで話題になった「思考・判断・表現」の評価も、前よりもよいものにしようとして出てきたのだと思います。教科調査官や全国から選ばれた学者や教師が議論を重ねて作った指導要領なので、「思考・判断・表現」の評価の導入もそれなりの理由があってやっているはずです。しかし実際の授業はうまくいっていない。そのギャップが大きい。指導要領を作成する過程でそうしたギャップは予想

されていたはずで、それなりの手当てをしたと思うのですが、現実にはおかしなことになっているのはどこかが狂っているのだろうと 思います。この座談会でその問題を指摘するのはよいのですが、なぜギャップが生まれたのかという理由をはっきりさせるための調査や準備がわれわれに必要だと思います。単に問題を指摘するだけでなく、もっと深く、どうしてこのような狂いが生じたのか調査する必要があるだろうし、それではどうしたらよいかという提言も模索していく必要があるでしょう。例えば各県の指導主事が現場を回って指導要領にもとづいた指導を行っているはずだが、それに対する現場の反発とか無視とかいったことがあるかどうかといったことも確かめる必要があると思います。最近評価について感じるのは、評価の方法についての研究が進んでいるということです。統計学の手法を取り入れるなどして評価の分野でかなりレベルの高い人たちが出てきている。それに比べて、指導法・教授法の研究は影が薄い。コロナ禍によってかき消されているといった印象があります。コロナ禍のために授業のよしあしの前に授業がやれればよいといった事態になっているからでしょうか。最近の傾向として、英語教育の研究が評価に力を入れ過ぎて統計的なことに向かってしまい、英語の授業自体を検証することが少なくなってしまったのかもしれないとも思います。私が指導要領に関わっていたときは、英文和訳中心からコミュニケーション重視への転換という大きな視座で考えて、細かいところにはタッチしていなかったのですが、議論が進んで指導要領が細かいところにタッチするようになって、それがかえって枝葉末節にこだ わって間違いを生んだということであれば、それはまずいことだなあと感じます。「木を見て森を見ない」評価というのが全体の傾向だとしたら困ったことです。

**司会（元高S）**　指導要領は生徒の英語力を伸ばすためのものなのに、逆効果になっているような気がします。枝葉末節というか評価のことだけが独り歩きしている。では生徒の英語能力を伸ばすにはどうしたらよいかということを私達が考えなければいけないと思います。われわれがやるべきことをやっていれば指導要領が求めるものになるはずなのにそうなっていないのがいちばんの問題だと思います。これからも引き続き話し合いを深めていきたいと思います。本日はありがとうございました。